

# 気象庁キャンペーン資料

14 - 6

## 気象庁広報室編集

### 6月の気象

#### 梅雨期間の雨の降り方

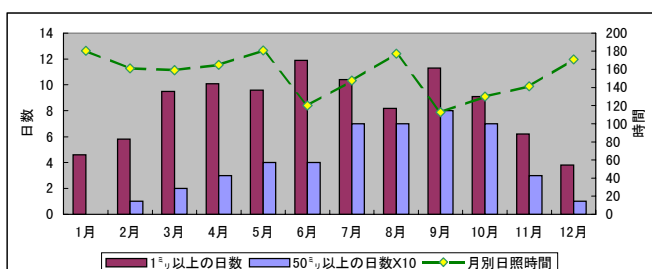
6月になると、北海道を除く日本の各地に梅雨の季節が訪れます（沖縄や奄美地方だけは概ね5月に梅雨入りし、6月下旬に梅雨明けとなります）。

梅雨入りから明けまでの梅雨期間は、例えば東京（関東甲信地方）の平年値（1971～2000年の平均）では、梅雨入りは6月8日頃、梅雨明けは7月20日頃ですので、約42日間となります。

梅雨に入ると、前線が日本の南海上に長々と東西に停滞する日が多くなります。梅雨の期間は、雨の降り方から「前半（おおそ梅雨入りから6月下旬まで）」と「後半（前線が本州付近まで北上する6月下旬から梅雨明けまで）」の2つに分けられます。

梅雨前半の雨の降り方の特徴は、弱い雨が降り続くことです。これは停滞することの多いオホーツク海高気圧の影響で、北日本から東日本の太平洋側の地方に海上を渡って海面水温より気温の低い湿った北東風が吹き込むためです。その結果、弱い対流を生じ、霧や層雲などの下層雲が発生し、曇って弱い雨が降り続くことになるのです。ちなみに、この冷たい北東風は「やませ」と呼ばれ、長期間続くと低温や日照不足によって農作物の生育不良などの冷害を引き起こします。最近では、1988年や1993年に広い範囲で冷害となった例があります。

下の表は、いずれも東京の月別平年値で、日降水量が1ミリ以上の日数（棒グラフ左）、50ミリ以上の日数（棒グラフ右）及び日照時間（折れ線グラフ）を示しています。

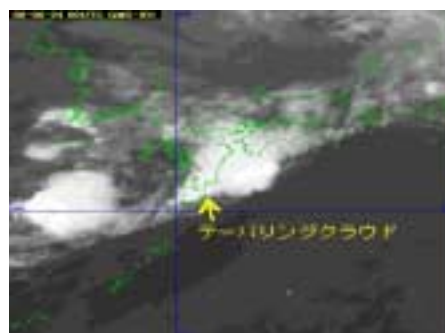


この表から、6月は日降水量1ミリ以上の日数が年間で最も多いことが分かります。ところが、日降水量50ミリ以上の日数に着目すると、6月より7月～10月の方が多くなっています。また、6月の日照時間は9月に次いで少ないことが分かります。これらのことから「6月は日照時間が少なく、弱い雨の日が多い月」だといえます。

梅雨後半の雨の降り方の特徴は、強い雨が局地的に短時間に降ることです。これは太平洋高気圧が強まり、梅雨前線が本州付近まで北上し、前線の南側では高温・多湿な南寄りの風が入るためです。特に、西日本では熱帯地方からの暖かく湿った空気が狭い範囲に集中し、前線活動が活発になります。高さが1万メートルを超えるような発達した積乱雲が発生することもあります。この時期、落雷や降ひょうなどを伴った1時間に30ミリ以上の激しい雨によるがけ崩れや山崩れといった、土砂災害や洪水などの大雨災害が発生することがあります。

このように梅雨期間は、前線の北上や活発化によって大雨となることがしばしばあります。そのため、地元の気象台の発表する警報や気象情報に注意し、迅速な対策をとることが必要です。

下の写真は、1999年6月下旬に九州南部で大雨災害が発生したときの気象衛星「ひまわり」の画像で、激しい雨を降らせた雲域が見られます。この雲域の南西端では積乱雲が次々と発生しており、先のとがったニンジン状の雲域（「テーパリングクラウド」と呼ばれます）であるのが特徴です。



1999年6月24日

午前9時の赤外画像

### 「20 世紀の日本の気候」が刊行されます

2001（平成 13）年に発表された IPCC（気候変動に関する政府間パネル）第三次評価報告書は「少なくとも 20 世紀後半における温暖化のほとんどは、人間活動による大気中の温室効果ガス濃度の上昇がもたらした可能性が高い」と結論付けました。このまま地球温暖化が進めば、異常気象の増加などにより私たちの生活に大きな影響があると予想されています。

気象庁がこの春に刊行する「20 世紀の日本の気候」は、21 世紀の初めにあって 20 世紀の気候を振りかえり、私たちの住む日本の気候が 20 世紀中にどのように変わってきたかをまとめたものです。

「20 世紀の日本の気候」では以下のような内容が掲載されています。

- ・平年値で見た日本と世界の気候
- ・20 世紀の気温や降水量の長期変化の実態
- ・20 世紀の日本の気象災害
- ・21 世紀の気候の予測

また、資料として、

- ・ IPCC 第三次評価(第一作業部会)報告書要約(和文)
- ・昭和以降の気象災害年表
- ・平年値表(月平均気温、月降水量)

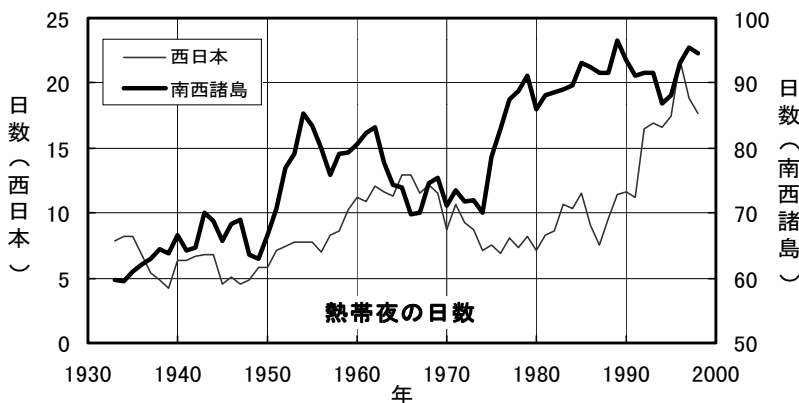
も掲載しています。

各項目は独立した記述となっており、平易な言葉とグラフ等で解説されています。随所に参考となるコラムも挿入されています。

「20 世紀の日本の気候」には CD-ROM が添付されています。この CD-ROM には、本書に掲載した図表のデータのほか、世界の月平均気温・月降水量の平年値など様々な気候データが収録されています。

この CD-ROM によって、気候変動や地球温暖化関連の資料や教材を作成できます。

本書は、政府刊行物センターはじめ全国の有名書店で購入できるほか、郵便局窓口からも「政府刊行物ブックポスト」サービスにより購入を申し込むことができます。



左図：西日本と南西諸島の都市化の影響の少ない地点における熱帯夜の日数（5 年移動平均）

解説：大都市以外においても熱帯夜の日数は増えています。

右図：東日本の太平洋側と日本海側における日降水量 50mm 以上の日数（5 年移動平均）

解説：東日本の太平洋側では大雨の日数が増えています、日本海側では減っています。

